

保育者としての「成長」に関する研究 －自由記述の質的検討－

西川 晶子

【はじめに】

社会全体の子育て機能の低下が指摘される昨今、保育の質の維持、向上は国家的な課題といってもいいだろう。

研修会によって各園の保育の評価や質の向上をはかる取り組みは従来から行われており、また厚生労働省では補助金制度の改革によって保育士のキャリア形成を促す施策が検討されるなど、様々な取り組みがされている。

保育の質の維持、向上を促進する要因として保育者の「成長」は不可欠だが、保育者にとっての「成長」について、保育者自身の声を検討した論文は少ない。保育者自身がどのように、自らの「成長」について実感し、なにを指標としているか。について検討したのが、本稿である。

【目的】

本稿では、実際に保育者たちが日々の実践のなかで、自らの職業経験における「成長」についてどのようにとらえているか？またどのような指標や実感をもって自らの成長ととらえているのだろうか？という点について明らかにする、という目的を持っている。

研究者からの一方的な視点をできるだけ避け、保育者の自由な実感をより浮き上がらせるために、質問紙における自由記述の質的な分析方法を取っている。

また本稿は第22回日本発達心理学会大会抄録（東日本大震災のため開催されず）に掲載された論文に大幅に加筆修正したものであることをお断りしておく。

【方法】

2009年9月から11月にかけて長野県南部の公立保育園108園に対して質問紙を送付した。(資料編 I 参照) 年中クラスの担任保育士を中心に回答を依頼した。50通の回答を得た(回答率46%)

保育者の「成長」について以下の質問により自由記述で回答をもとめた。

【質問項目】

あなた自身が保育者として成長したと感じたのはどのような時ですか?自由に記述してください。エピソードなどがあれば書いてください。

【分析方法】

質問に対する自由記述から、コーディングをおこなった。記述された文章から、研究対象として注目すべき語を抽出した。抽出された語について意味的にまとまりのあるグループに分け、命名しコード名をつけて、分類した。

次に各コード名の全体のデータ内での出現回数を検討した。【結果1】

また自由記述回答において、コードを多く含む代表的な回答を選択し、それらに共通する構造をもつ意味のまとまりを抽出した。【結果2】

コーディングに際しては筆者のほかに1名の研究者に協力を得、コーディングの妥当性を確認した。

【結果1】

表1. 項目別出現回数（率）

コード名	出現回数（率）
ひとりひとりの発達によりそう	24（48％）
ひとりひとりの思いをうけとめる	18（36％）
保護者からの支持、信頼関係	11（22％）
持続し続ける反省と改善	9（18％）
クラスのまとまり	6（12％）
園全体への配慮	4（8％）
子どもの発達、保育の見通し	4（8％）

コード名 ひとりひとりの発達によりそう

出現回数 24 n=50

ひとりひとりユニークな発達の軌跡をたどる子どもに、達成や規範、保育者の都合をやみくもに達成を強いるのではなく、それぞれの発達の今を正確にとらえ、一見マイナスに見える行動についても発達の可能性を信じることができるようになると、ひとりひとりがよく見えてくる、自分に対して「成長」を感じる。

回答例（原文ママ以下省略）

- ・ 少しずつ子どもの発達が分かって一人一人への対応ができるようになってきたと思う。子どもにとっての良いことが少しずつ分かり、手立てを学ぶ中で、より良い対応を心がけて行おうとするようになってきた。（保育暦3年）（以下保育歴省略保育歴の順に配置）
- ・ 保育者の都合ではなく、子どものペースに合わせて活動を行えるようになった。（6年）

- ・ 経験年数を積み、様々な年齢の担任をさせてもらったり加配をしながら子どもと接する中で、クラスに子どもを合わせるのではなく、ひとりひとりの子どもに合った保育を支援していくことでクラスがまとまることを知った。(9年)
- ・ 保育する上で子どもの出や言葉、行動を待つことが出来た時です。ゆっくりしている子や子どもが何か言いかけても保育士の焦った気持ちがあれば子どもがしゃべる前にしゃべりすぎたり、やってしまったりします。それでは自分で考えてやる事が出来なくなります。感情的にならず、子どものひとりひとり、そして全体を見守りゆっくり待てる保育を心がけたい(11年)
- ・ 若い頃より子どもひとりひとりとじっくりかかわったり、向き合うことができるようになってきた。また子どもを「待つ」信じる」ということも経験の中から大事にできるようになってきていると感じる。子どもとの距離が近くなり小さな成長に気付き、発見を共に喜び合えたり、同じものを見て感動することが増えたと思う。(18年)
- ・ 一般的に「いけない」「ダメ」とされている行為を子どもたちがしている時、すぐに「ダメ」「いけません」と言わずに少し様子をみたり、どうしてこのようなことをしているかを聞こうとできるようになった時に感じた。というか、あまりこういうことを感じることはありませんが・・・(21年)
- ・ 子どもがとってしまうマイナスの方向の行動に対して表面的なことだけで判断するのではなくなぜそのような行動になってでしてしまうのか内面を知りたい。そのためにいろいろな方向から子どもをみられるようになった時(30年)

コード名 ひとりひとりの思いをうけとめる

出現回数 18 n=49

子どもは日々の中で期待に気持ちをふくらませたり、思いをうまく表現できなくて、暴走してしまったりふとしたことで気持ちがしぼんで、引きこもってしまうこともある。その瞬間瞬間の思いをうけとめて映し出してくれる保育者の存在によって、次の行動へと心と身体をむけていくことができる。このコードでは、子どもの思いをうけとめるられるようになったことで、保育がスムーズになっていくことがセットで語られた。

回答例

- ・ 共感できたと思った時、自然にできているようでもどこかでエゴがあった気がする。心から共感できるようになった時、自己満足かもしれないが成長できたと思った。(記載なし)
- ・ 子どもの目を見てその子どもの思いがわかる時(記載なし)
- ・ 子どもの気持を考えて冷静になって叱ったり、言い聞かせられるようになったこと。一人一人の子どもをよく見て受容できるようになったこと(5年)
- ・ 子どもとの距離が近くなり小さな成長に気付き、発見を共に喜び合えたり同じものを見て感動することが増えたと思う。(18年)
- ・ 子どもの気持がわかってその子が求めている対応が出来た時。妹が生まれてから登園時ぐずるようになったA君保育士が受け入れに出ると顔を見ながら後ろに下がって行く「A君お母さんのかわりにだっこしてあげるよ」にっこり笑ってだきついてきたA君。「もういい、おりる」自分で入室できた(20年)

- ・生活の流れに添わない子に「早くやりなさい」「ちゃんとやりなさい」とついで言うことが多かったのだが、ふと足をとめ「〇〇ちゃんはまだこれで遊びたいんだね」とその子の思いを感じ取って言葉にしてあげることしたら、わりとスムーズに気持ちを切り替え次の行動に移っていった。努めて子どもの思いに共感するようにしていったら、子どもひとりひとりがよく見えるようになってきた。(30年)

コード名 保護者からの支持 信頼関係

出現回数 11 n=49

保護者との関わりは若い保育者にとっては、もっとも難しい分野といえるだろう。子育て支援の最前線として位置づけられている保育園では、親への支援も重要な役割として担わなくてはならない。経験や高い対人関係スキルが求められる難易度の高い分野であるだけに、保育者の「成長した」と感じる実感もひとしおなのであろう。

回答例

- ・1年目に保護者とのトラブルがあり何度も暗くなるまで話したり一方的にいわれたりすることがあったが、そのことがあったこそ自分自身強くなれたし、怖いものがなくなった。やめたい位辛かったけれど、やめなくて本当に良かった。(3年)
- ・保護者に認めてもらえたとき。成長を親から認めてもらえたり 言葉をもらった時 (8年)
- ・保護者から「先生が担任で良かった」と言って頂いた時。とても嬉しくてこれから頑張っていこうと思った。自分の意見よりまず保護者の話をゆっくり聞けた時。(10年)

- ・また保護者と心を合わせ、その子の成長を見守ることができ、一緒に喜び合うことができたときです。(12年)
- ・難しい親との対応の中で 信頼関係を積み重ねることで結果があらわれた(30年)
- ・保護者の方から相談され、「先生に相談して良かった。気持ちが楽になったといわれたとき(31年)

コード名 持続し続ける反省と改善

出現回数 9 n=49

保育には正解が無い、と言われるだけに、保育者として成長していくために、自らとその保育のふりかえり、常に改善していくことを心がけるという記述が見られた。

回答例

- ・毎日毎日反省の日々です。でも自分が学生の時に講師の先生に「自分の保育はカンベキ！何も問題ない」と思うことが一番の間違いである」といわれたことがあったので”成長した”と感じるより、反省を忘れないようにしたいと思っています。(6年)
- ・新人の時はいっぱいいっぱいではなかなかな周りがみれずにいたが、少しずつ視野も広がり周りの意見を聞いたりしながら広い視野で(以前よりですが)子どもを見れるようになってきたと思う。(7年)
- ・保育をする上で自分自身 「これでいい」と思ったら成長していかないのだから常に向上心を持ちながら子どもたちと向き合っていきたいと考える(18年)

- ・ 経験は長くてもまだまだ未熟です。子どもひとりひとり違い、親も違います。そのときそのときが常に勉強です。若い子からもいろいろなことを学んでいます。発見があります。以前より広い気持で色々なことを受け入れられる事が少しは成長できているのかなと思います。(28年)
- ・ 出来ないことのある子には、どうしてできないのかな、自分の与えた課題が難しかったのかなうまくいかない原因は何かな、この子がこの活動を通して楽しめるために私はどんな援助ができるかな・・・とそういう考えになりました。(30年)
- ・ 冷静に考えると10年15年経験してきて今までの自分を見つめなおし、どんな保育だったかじっくり考える機会となった。それからは後輩の工夫している点、先輩の力量を盗みながら柔軟に考えられるようになり、今に至っています。(30年)

コード名 クラスのまとめり

出現回数 6 n=49

保育歴の短い被験者を中心に出現した。クラスを一人で回せるようになること、子どもたちとの信頼関係を築いて、多様な子どもたちのクラスがまとまっていくことは、若い保育者にとって大きな成長の通過点として感じられるのであろう。

回答例

- ・ 色々な子がいる中クラスがまとまってきていると感じるとき (4年)
- ・ 一人担任でクラスをもったとき子どもたちが話をじっくり聞いてくれたりクラスをまとめることが子どもの成長を見ることができたとき、自分自身の成長を感じた。(8年)

- ・自分が一人でクラスをまわせるようになった時 (8年)
- ・経験年数を積み、様々な年齢の担任をさせてもらったり加配をしながら子どもと接する中で、クラスに子どもを合わせるのではなく、一人一人の子どもに合った保育を支援していくことでクラスがまとまることを知った。
(9年)

コード名 園全体への配慮

出現回数 4 n=49

担任するクラスをまわすだけで精一杯の時期から、園全体を見渡す高い視点が生まれてくるのが成長と感じられる。

回答例

- ・自分のクラスだけでなく同学年の子ども、園全体に目を配れるようになってきたこと (18年)
- ・1年間クラス運営をして3月末を迎えた時、年長の担任をして園全体のリーダーとして1年間過ごした時 (29年)

コード名 子どもの発達 保育の見通し

出現回数 4 n=49

保育の流れや子どもの発達について見通しを持てるようになることで 落ち着きが生まれ、先を見通した保育ができるようになることが成長。

回答例

- ・子どもにとっての危険予測や先の見通しが持てるようになったとき。(2年)
- ・2歳児から年長まで持ち上げで4年間同じ学年の子どもたちを担当させてもらった後、年少の担任になった時、4年間の経験から新たな子どもを見

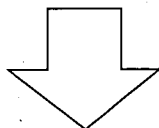
ることができ、1年経ったらこういう姿になるだろうという成長の予想が立てられたことで、先を見据えた保育ができたと感じた時（5年）

【結果2】

自由記述回答において、コードを多く含む（4以上）代表的な回答を選択し、それらに共通する構造をもつ意味のまとまりを抽出した。

未熟さのあらわれ

年齢なりの達成を求めたり、出来ることが良いことと、集団優先、保育者の都合で子どもをひっぱっていた。



成長の成果のあらわれ

多様な一人一人の発達によりそって、子どもに共感でき、より広い視点でとらえることができたり、見通しを持って子どもを見守ることが出来るようになる。

代表的な回答（コードを4以上含む）

1.若い頃より子どもひとりひとりとじっくりかかわったり、向き合うことができるようになってきた。また子どもを「待つ」信じる」ということも経験の中から大事にできるようになってきていると感じる。子どもとの距離が近くなり小さな成長に気付き、発見を共に喜び合えたり、同じものを見て感動することが増えたと思う。保育をする上で自分自身「これでいい」と思ったら成長していかないので常に向上心を持ちながら子どもたちと向き合っていきたいと考える（18年）

2. 生活の流れに添わない子に「早くやりなさい」「ちゃんとやりなさい」とつい言うことが多かったのだが、ふと足をとめ「〇〇ちゃんはまだこれで遊びたいんだね」とその子の思いを感じ取って言葉にしてあげることをしたら、わりとスムーズに気持を切り替え次の行動に移っていった。努めて子どもの思いに共感するようにしていったら、子ども一人一人がよく見えるようになってきた。
(30年)

3. 子どもの成長をじっくりと待つことができるようになった時 子どもの目を見てその子どもの思いがわかる時 今日保育から明日の保育への展開をたのしく考え出せるようになった時 子どもたちがどんなことをしたら喜んで楽しめるだろうかと常に考え、アイデアがポンポンと浮かびあがる時 などでです。(記入なし)

4. 経験年数が浅いうちは保育=子どもを躾することとあっていて、この年齢ならここまで出来てほしいという思いで自分の保育観で子どもを引っ張っていた時期があった。経験年数を積み、様々な年齢の担任をさせてもらったり加配をしながら子どもと接する中で、クラスに子どもを合わせるのではなく、一人一人の子どもに合った保育を支援していくことでクラスがまとまることを知った。
(9年)

5. 保育士になりたての頃は完璧を目指し、子どもたちにもそれを求めたような気がします。年齢の発達段階よりも高いところを目指し 運動会や発表会などでは「すごい！」と言われるとうれしかったように思います。出来ない子がいると許せないくらいの勢いでした。子どもたちは私の見えないところで友達にいぼったり意地悪をしたり隠れて嫌いな食べ物を持ち帰った子もいました。今となっては申し訳なさでいっぱいです。出来ないことのある子には、どうしてできないのかな、自分の与えた課題が難しかったのかなうまくいかない原因

は何か、この子がこの活動を通して楽しめるために私はどんな援助ができるかな・・・とそういう考えになりました。(30年)

【考察】

保育者の仕事は、日常のなかでいくつもの対極する概念の間で正解のない問いを立て続けることではないだろうか。つまり個と集団 自由と規範 能動と受動 「ありのまま」と「こうあるべき」といったように。

鯨岡(2009)は保育の評価は何よりも子ども一人ひとりが「私は私」と自己主張できることを持って同時に「私は私たち(みんな)の中の一人」と周りに目をむけて周りの子どもと共に生きようとする心を併せもった一人の主体として育てているかどうか懸っているとして保育の評価の最大のポイントとしている。

今回の調査の結果から見てきたこととして、保育者が成長するにつれて子どもの個の発達や思いに気づくようになっていく、という経過がみられた。また、経験年数の浅い保育者からは、子どもの躰やクラスがまとめられるようになること、つまりは 集団 規範という方向が成長のあかしとして語られた。つまり、経験年数の浅いうちには、子どもを集団生活に適応させることや年齢相当の発達へのうながしが保育者の成長の目標となるが、経験年数の長い保育者からは、個の発達や思いに目を向けてありのままの子どもに共感することが自らの成長のあかしとして語られている。

このことは保育者にとって、当面の目標として子どもの集団生活への適応やクラスのまとめ、年齢相当の発達が暗黙裡に求められていることが推測できる。

今回の調査の質問項目「あなた自身が保育者として成長したと感じたのはどのような時ですか?自由に記述してください。エピソードなどがあれば書いてください」からは個人の成長達成としての言葉が語られたが、年齢の浅い保育者にとっては、保育者のあるべき姿として、子どもを集団生活に適応させ、年齢相当の達成を促し、クラスをまとめられる保育者像が当面の成長目標として

四苦八苦する姿があり、それがその後覆されていくという【結果2】が導かれた。

やまだ（2011）は従来の発達心理学が一方的な時間軸のなかで年齢相当の発達をとげることを暗黙裡の理想としてきたことから脱却し、生涯発達心理学として子どもの発達を関係性の網目のなかでとらえていこうとするナラティブ論を展開している。

今回の調査における保育者の語りにも従来の発達観への服従とそこからの脱却が語られており、あたかも相似形をなすような結果となった。

【参考文献】

加藤繁美.自分づくりと保育の構造（1997）ひとなる書房

鯨岡峻 エピソード記述を通して保育の質を高める（2009）保育学研究第47巻 第2号 日本保育学会

日本子ども学会.保育の質と子どもの発達アメリカ国立小児保健・人間発達研究所の長期追跡研究から（2009）赤ちゃんとママ社

やまだようこ（2011）「発達」と「発達段階」を問う：生涯発達と」ナラティブ論の視点から 発達心理学研究 第22巻 第4号 日本発達心理学会

【謝辞】

質問紙にお答えくださった保育者の皆様に厚くお礼申し上げたいと存じます。

また、短大での教育活動にご協力くださっている教職員の皆様、近くで支えてくれている家族に、感謝しています。ありがとうございました。